

平成30年度 第2回 講演会記録

日 時	平成 30 年 4 月 28 日 (土) 13 時～16 時	
会 場	此花会館梅香殿	
講 師	NPO 法人里海づくり研究会事務局長 田中 丈裕 先生	
演 題	瀬戸内海における里海づくり 30 年の歩み：新たな未来へ	
備 考	参加者数 172 名	記録 藤原雄平

はじめに

冒頭、田中克先生の講師紹介のご挨拶の中に、田中丈裕さんに、カキ殻を利用した干潟再生を有明海で実用化する指導にきていただいたご縁があること、現在岡山県備前市で実施されている「里海」作りの活動を「里山」とも結びつけ、地域一体への広がりを目指す旨のお話がありました。備前市日生は岡山県の東南端に位置する古くからの漁業の町で、底引き網、小型定置網（つぼ網）、流し網漁、カキ養殖業などが盛んな漁師町です。1981年、27歳の岡山県水産技師であった田中丈裕先生は、クルマエビ種苗放流作業で日生のつぼ網組長の本田和士氏と出会い、稚魚が育つにはアマモ場が重要との説に心を動かされ、その後のアマモ場再生を柱にした里海づくりの契機となったとのこと。多くの映像を駆使し、里海づくり研究会議の活動内容を紹介されました。



<講演要旨>

1. 「里海」とはなにか

- (1) 定義：1998年、九州大学の柳哲雄先生が提唱した概念で、“人が手を加えることで、生物多様性と生産性が高くなった海”を「里海」と言い、瀬戸内海で生まれ、日本発の世界語として広まりつつある。多くの学識者がそれぞれの定義を述べており、集約すると「森と海のつながりが基調となっている海であり、水産資源の持続的利用が可能な海」をいう。
- (2) 講師が心を動かされた「漁業は海のおこぼれを頂戴する産業である」という漁師の言葉は、海への畏敬の念がよく表れており、この精神を大切にしたいと思う。漁場・資源を守るためには生態系と生物多様性の保全・修復が大切で、磯は地付き・沖は入会いという古くからの漁業権制度、すなわち「自分たちの漁場は自分たちで管理する、海の守り人」というこの意識が「里海」活動のベースとなっている。

2. NPO 法人里海づくり研究会議設立：

巨大な浄化機能を持つ干潟の減少、魚貝類の産卵・育成の場である藻場の減少は生物多様性・漁獲量の減少という日本漁業の危機を生み、対策として「里海」の復活が急務であることから、2012年にNPO法人里海づくり研究会議を設立した。漁師の知恵と科学を結び合わせるべく、メンバーのほとんどは大学、公的研究機関、民間企業の研究者や技術者で、産・官・民の多様な分野の人たちが個性的な集団を構成し、日生の海を中心的なフィールドとして活動している。

3.. 日生のアマモ場再生活動の展開

- (1) 日生を始め岡山県の海は元来アマモが豊かな海であったが、児島湖の造成、沿岸の埋立、海砂の採取、石油流失事故などの影響によりアマモ場は激減。日生においては、1950年代までは590haを占めていたアマモ場が僅か5haにまで減少した。

- (2) アマモは根と種子で増殖し、その群生の中で多くの魚種が産卵し稚魚期を過ごす。水温上昇抑制や、3) 日生は日本で初めてアマモ場の再生活動をした場所。1985年、岡山県水産試験場からアマモの種子採取技術の指導を受け、つば網漁師や有志で再生の取り組みを開始した。最初から上手く行ったわけではなく、200haまでに回復するには30年を超える年月を要した。
- (4) アマモ場再生活動を始めた1985年頃の初動期から2012年頃の拡大期までの経緯
配布のレジュメに詳しく説明あり、当記録への記載省略。

4.. レジュメに記載がなく、映像資料で説明のあった主な項目

(1) 「アマモとカキの里海」を実現するために実施したこと

- ① 五味の市開設（日生の魚介類の販売）、② 海底ごみの回収 ③ サワラ資源回復計画
④ 底曳網による落ちカキの回収・販売 ⑤ 海洋牧場づくり ⑥ 廃カキ筏から竹炭製作。この炭を用いて独特の風合いを持つ備前焼きの開発に成功したとのこと、

(2) アマモとは何か

「リュウグウノオトヒメノモトユイノキリハズシ」という日本一長い俗名をもつアマモの生活史や、アマモ場に棲む魚類について詳細な説明あり。

(3) アマモ場の機能

- ① 魚介類の産卵場・保育場 ② 光合成による酸素の供給 ③ 漁業資源のストック
④ 魚介類の餌場 ⑤ 水温上昇抑制 ⑥ 栄養塩の吸収 ⑦ CO₂の固定 ⑧ 赤潮発生抑制
⑨ 腐植食物連鎖を通じた餌料供給 ⑩ 懸濁粒子や沈降物の捕捉分解 など多くの機能がある。

(4) 日生町漁業協同組合のこれらの活動が評価され、2016年8月25日（木）に『海洋立国推進功労者表彰』で、総理大臣賞を受賞した。

(5) 「アマモとカキの里海」がこれから目指すもの

『海』では“太く・長く・滑らかな物質循環の実現”、『地域』では“里山・里海・「まち」を包括する循環型地域社会の構築”し、「里海・里山ブランドの構築」し、「人と物の流れを通じた文化・食の交流」を実現すること。そして地域と世代をこえて＝里海・里山・「まち」をつなぎ（岡山県下で現在8市町村と連携）、JA岡山ではカキ殻を利用した「里海米」を開発販売するなどの成果をあげている。
以上です。ご清聴ありがとうございました。

【Q&A】

Q：日生のアマモ場が1950年代まで590haあったのが1985年代には12haになり、漁獲量が当然減少したと思いますが、漁業をどのように継続しましたか？

A：カキ養殖に転換したのです。いまま漁船漁業よりカキ養殖の売り上げのほうが多いです。

【田中克先生 コメント】

アマモ場再生に30年の時間がかかり、しかもその前半は成果が上がらない中でも未来志向を持ち続けて努力を継続された結果、後半にそれが実り花開いたというお話に、物事が眼に見える形で動くには、たゆまぬ努力に支えられた長い年月が必要であることに改めて思い至りました。しかも、その概念を海辺の日生だけでなく、内陸部を含む岡山県下に広げているとのことに感激しました。環境省の「つなげよう、支えよう森里川海」プロジェクト運動がいっそう広がって欲しいといつも願っているのですが、この運動が日生から岡山県全域に広がっていることがよくわかり、心強く感じました。自然観察会を日生で行いますので、ぜひ多くの方に参加してほしいと願っています。
以上

